■修士設計
✿駿建賞受賞作品

小豆沢体育館建替計画

～地域コミュニティの拠点となる健康スポーツセンターの設計～

早田倫人

設計主旨

東京五輪をブームに各地方自治体は体育館づくりに力を注いだ。当時の体育館は競技中心型であり、区の中心的な役割を担う体育館であった。しかし、近年建設されたスポーツ施設にその役割は置換され、地域の運動の場として位置づけられているものの、区内で一番の規模を有しているのにもかかわらず、現在のスポーツニーズの変化に対応できず、また施設の老朽化の面から、利用者が離れている状況である。

本計画区は、昭和43年、板橋区小豆沢公園内に建設された小豆沢体育館を、地域住民の多様なスペース、健康増進の場として建替えを行う。

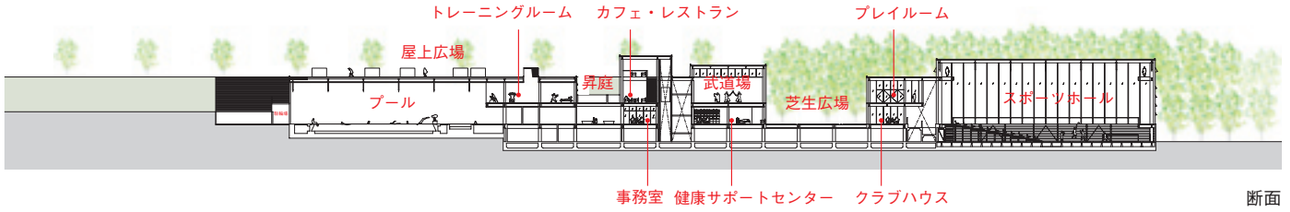
小豆沢体育館は公園内に建てられたにもかかわらず、公園と街とを切り裂いたイメージを受ける。そのため、本計画は、小豆沢公園と一体化したランドスケープを目指すとともに、駅・街・公園へと通り抜け可能なパスを仕掛け、地域貢献するものとした。さらに、公園内の散歩道を建築内へ主動線として取込み、建築内の全ての活動を伺えるように各空間を構成している。

各空間は、外部と吹抜けによって分け、各空間に距離を持たせることにより、透明性の壁ができる。ソト・ウチ（吹抜け）を介して動の空間・静の空間が構成し、さまざまな活動が伺える空間構成とし、外部を取り込んだ豊かな環境を創りだす。

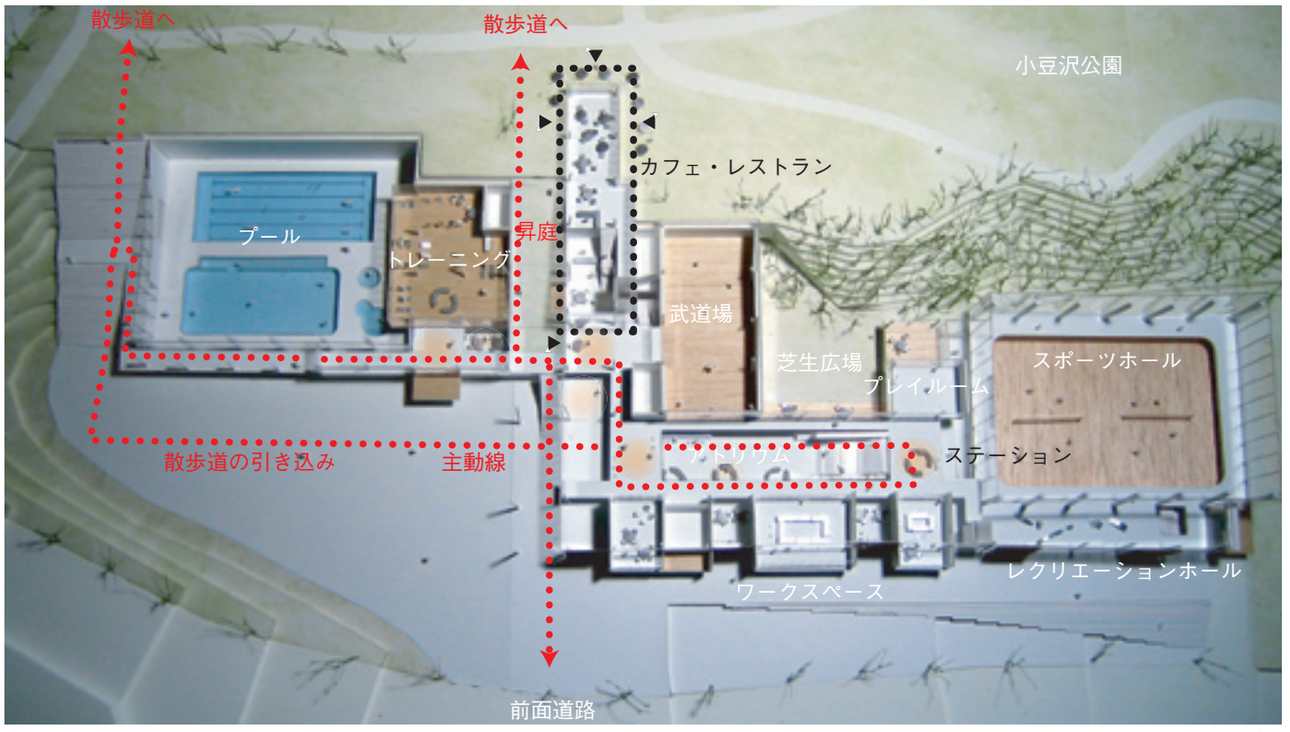
また、高齢者に配慮し、体を休める場所、交流の場所、水飲み場などを主動線（散歩道）上の動の空間と静の空間の間にステーションとして分散配置し、空間に連続性を持たせる構成としている。

講師評：若色峰郎

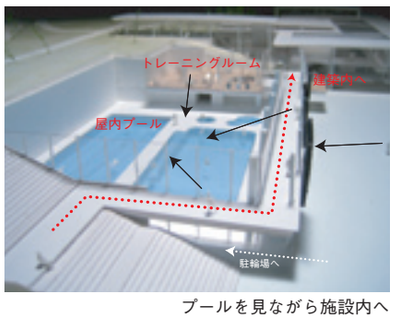
近年、地域施設はコミュニティの拠点として多様な施設型へと展開をみせている。日常的なスポーツの場となる地域のスポーツ施設は、従来は若者中心の競技指向型で、団体利用などが大半を占める状況にあった。しかし、少子高齢化、健康志向などを背景に、さまざまな年齢層が個人で利用するというニーズの多様化をみせている。早田案は、この新しいニーズに着目して、東京オリンピック以降に建設された地域公共体育館の更新として提案したものである。施設内容としてはスポーツのプログラムに加えて、健康づくりの場、地域情報ギャラリー、ワークスペースなどの地域コミュニティのプログラムを併設したもので、今後の地域施設としてのスポーツ施設のあり方を予測させる提案として評価したい。また、敷地内の施設として、公園内にパスを設け、多様なアクティビティを昼、夜間にわたり眺められる楽しさが感じられる。



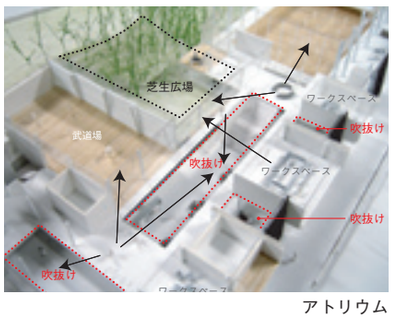
断面



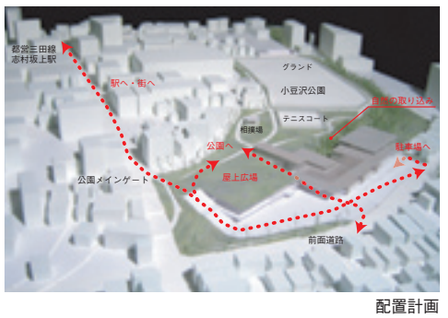
平面計画



プールを見ながら施設内へ



アトリウム



配置計画

外観

アトリウム

スポーツホール